



TITLE:

# ドゥク派開祖ツァンパギャレー (1161-1211)の伝記研究 --ブータン 仏教のルーツ--

AUTHOR(S):

熊谷, 誠慈

---

CITATION:

熊谷, 誠慈. ドゥク派開祖ツァンパギャレー(1161-1211)の伝記研究 --ブータン仏教のルーツ-. チベット・ヒマラヤ文明の歴史的展開 2018: 279-309

ISSUE DATE:

2018-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/235461>

RIGHT:

# ドゥク派開祖ツァンパギャレー（1161-1211）の伝記研究 —— ブータン仏教のルーツ ——

熊谷 誠慈

## A Study on the Biographies of the Founder of Drukpa Kagyü School: Tsangpa Gyare (1161-1211)

KUMAGAI Seiji

**Abstract :** In Bhutan there are two major Buddhist schools: Nyingma (rNying ma) and Drukpa Kagyü ('Brug pa bka' brgyud). While Nyingma is much more widespread and has been vastly researched since it is the oldest among the four main Buddhist schools in the Tibetan cultural area, Drukpa Kagyü still remains insufficiently researched despite having had ruled Bhutan.

Fortunately, Western researchers such as Michael Aris, John Ardussi and Yoshiro Imaeda have provided us with a general outline of Drukpa Kagyü history. However, some of its details still remain unclear. Due to difficulties in accessing many of his works, the character and thoughts of Tsangpa Gyare (gTsang-pa rgya-ras Ye-shes rdo-rje, 1161-1211), the founder of the Drukpa Kagyü, have remained a mystery.

Information about its founder is necessary to have a more complete or accurate understanding of the Drukpa Kagyü school. Thus, this paper aims to reexamine Tsangpa Gyare's life, character and thoughts. The methodology employed is as follows:

- (1) summary of his historical descriptions in chronicles and his biographies.
- (2) analysis of all of his collected works to construct those aspects of his life, personality and thinking that are not explicitly mentioned in chronicles and his biographies.

**キーワード：** ブータン仏教、ドゥクパ・カギュ派、ツァンパギャレー、ラルン、ドゥク派

**Keywords :** Bhutanese Buddhism, 'Brug pa bka' brgyud, gTsang pa rgya ras, Ra lung, 'Brug

## イントロダクション

### ブータンの仏教

チベットの地に仏教が公式に伝来したのは、吐蕃王朝を創立したソンツェン・ガンポ王 (Srong btsan sgam po, 581/618-649) の時代とされる。ティソンデツェン王 (Khri srong lde brtsan, 742-797) の時代には、インドの仏教学僧シャーンタラクシタ (Śāntarakṣita、寂護、ca. 725-788) と密教行者パドマサンバヴァ (Padmasambhava、蓮華生、8世紀) がチベット入りし、最先端の顕教と密教を伝えたという。

現在のブータンに相当する地域に仏教が伝来したのもチベットとほぼ同時期であると言われている。ソンツェン・ガンポ王の建立とされるキチュ堂 (パロ県) や、パドマサンバヴァの瞑想地に建立されたとされるタクツァン寺 (パロ県) など、7～8世紀を起源とする寺院が存在する。当時のブータンには統一王朝はなく、国家事業としてインドから仏教を輸入することはできなかったが、ブータンは吐蕃王朝の首都ラサと地理的に近かったため、吐蕃仏教が伝わりやすい位置にあったものと思われる。

組織的な布教が盛んになったのは12～13世紀あたりになってからだと思われる。ニンマ派のみならず、カギュ派やサキャ派など多くの宗派が布教を開始した。1616年にはドゥク派第17代座主<sup>1</sup>シャブドゥン・ガワン・ナムゲル (Zhabdrung Ngag dbang rnam rgyal, 1594-1651) がブータンに亡命し、現在のブータンに相当する地域を統一、ドゥクユル ('Brug yul、ドゥク派の国) を創立した。以後、ドゥク派を中心とする国家運営、宗教運営が行われてきた。

### ドゥク派開祖ツァンパギャレー

ドゥク派の開祖はツァンパギャレー・イエシェードルジェ (gTsang pa rgya ras Ye shes rdo rje, 1161-1211) である。ツァンパギャレーの生涯については、中井 (1970) や Martin (1979)、Miller (2005、2006) などが簡単に紹介しており、ツァンパギャレーという人物の生涯の概略を大まかに把握することは可能である。

---

<sup>1</sup> 後述の通り、ドゥク派における座主の数え方は研究者によって異なるが、本稿では、系譜を細かく記載している今枝 (2003: 280-282、2011: 206-208) のものを使用する。

しかし、これらの研究は限られた伝記しか参照しておらず、複数存在する伝記や歴史書についての総合的検証がなされていない。後述するように、逸話の内容や事績の年月などの情報は、伝記や歴史書ごとに異なる場合も多いが、先行研究ではそれらに関する言及が行われていない。ツアンパギャレーという人物を、より細かく、多角的に理解し直すには、重要な伝記や歴史書の情報を可能な限り参照して整理し、総合的に検証する必要がある。

本稿は、参照可能なツアンパギャレーの伝記と、歴史書におけるツアンパギャレーに関する記述の両方を精査し、ツアンパギャレーの人物像を歴史的観点から再検証することを目的とする。その際、ツアンパギャレー自身の著作についても適宜参照し、思想的側面からも再検証する。

具体的には、以下の2つの視点からツアンパギャレーに焦点を当てる。

- [1] ツアンパギャレーの歴史的位置づけ：前世や化身、師弟、法統の系譜に着目し、時代的前後関係から、ツアンパギャレーを歴史的に位置づける。
- [2] ツアンパギャレーの生涯：伝記や歴史書、著作集を参照し、ツアンパギャレーの人物像とその特徴を分析する。

### ツアンパギャレーの著作集

現在入手可能なツアンパギャレーの著作集は、ブータン版、ネパール版、ラダック版の3版である<sup>2</sup>。3種の著作集は互いに異なる著作も含んでいるため、欠けている著作を相互に補い、重複する著作の異本については比較校訂し、現存する全著作を網羅した著作集を作り直す必要がある。

表1から分かるように、ツアンパギャレーの著作のテーマは多岐にわたる<sup>3</sup>。ツアンパギャレーの著作のテーマは、瞑想や密教だけではない。哲学書から教育書、実用書に至るまで幅広い分野をカバーしており、ツアンパギャレーが多才な人物であったことが分か

表1 著作の分野別分類  
(Kumagai et al 2012: 50)

分野	作品数
i) 伝記・歴史	4 作品
ii) 哲学	6 作品
iii) マハームドラー	3 作品
iv) 瞑想	12作品
v) 実践	5 作品
vi) 口訣	4 作品
vii) 儀軌	2 作品
viii) 詩歌	2 作品
ix) 実用書	2 作品

<sup>2</sup> Kumagai et al 2012.

<sup>3</sup> Kumagai et al (2012: 50) を参照。現在、全著作の批判的校訂テキストを作成中である。同リストには収録されていない著作もあるため、リストの修正が必要である。

る。

本稿で扱う伝記や歴史書においても、ツァンパギャレーの人生の中で瞑想修行が大変重要な位置にあったことが分かるが、少年期における顕教哲学の学習や、成人後に取り組んだ教育活動や詩歌の創作活動などについても記述が存在している。

もちろん、伝記に記載されている記述すべてが史実であるとは言えないだろうが、ツァンパギャレーの著作の内容と照らし合わせることで、伝記の記述内容の一部については真偽の確認が可能となる。

### ツァンパギャレーの伝記

本稿では、現在入手可能なツァンパギャレーの7つの代表的な伝記を使用する。そのうち、ツァンパギャレーの直弟子によるものは最初の3つ（サンギェーブム作、マルトゥン作、ロレーパ作）と考えられる。マンガラバドラ作の伝記および匿名の伝記については作成時代が確定できていない。

また、ツァンパギャレー伝の特徴として、多くの詩歌 (mgur) が引用されている点が挙げられている。「詩歌を伴った伝記」 (rnam mthar mgur 'bum dang ldan pa) といった題名の伝記については、詩歌を含んでいることが題名から容易に推測される。また、マルトゥン作やペマカルポ作の伝記なども、題名では単なる「伝記」 (rnam mthar) としておきながら多くの詩歌を載録している。詩歌の中身は口訣であることから、単にツァンパギャレーの生涯を歴史的史実として伝えるのみならず、詩歌を通じた仏教教育も、ツァンパギャレー伝の大きな目的だと言えよう。

伝記の内容については後述するが、記載される出来事や年代については、しばしば伝記ごとに相違が見られる。

#### 1. サンギェーブム作ツァンパギャレー伝

作品名：『法主ツァンパギャレーの伝記』 (*Chos rje gtsang pa rgya ras kyi rnam thar*)

作者：サンギェーブム・デーモ・ジョツン (Sangs rgyas 'bum 'Bras mo jo btsun, birth: 12~13世紀)

著作年代：13世紀

エディション：(Thimphu edition) *Chos rje gtsang pa rgya ras kyi rnam thar*. In *dKar brgyud gser gyi 'phren ba: A Collection of Biographical*

*Materials on the Lives of the Masters of the Rwa-lun Tradition of the 'Brug-pa dKar-brgyud-pa Tradition in Tibet and Bhutan* (3 volumes), Thimphu: Tango Monastic Community, 1982, vol. 1, pp. 379-431. (\* TBRC's Work Number: 23861)  
(Palampur edition) *gTsang pa rgya ras kyi rnam thar*. In *Rwa lung dkar brgyud gser 'phreng: Brief Lives of the Successive Masters in the Transmission Lineage of the Bar 'Brug-pa Dkar-brgyud-pa of Rwa-lun* (4 volumes). Palampur: Sungrab Nyamso Gyunphel Parkhang, 1975-1978, vol. 1, pp. 397-452. (Reproduced from a set of prints from the 1771-1772 Spuns-than xylographic blocks.) (TBRC's Work Number: 19222)

2. マルトウン作ツァンパギャレー伝

作品名：『法主衆生の守護者ツァンパ・ギェルセーの伝記』(*Chos rje 'gro ba'i mgon po gtsang pa rgyal sras kyi rnam par thar ba*)

作者：マルトウン (Mar ston, birth: 12~13世紀)

著作年代：13世紀

エディション：(Dehradun edition) *Chos rje 'gro ba'i mgon po gtsang pa rgyal sras kyi rnam par thar ba*. In *Bka' brgyud gser 'phreng chen mo: Biographies of Eminent Gurus in the Transmission Lineage of Teachings of the 'Ba'-ra dKar-brgyud-pa Sect*. Dehradun (Published by Ngawang gyaltsen and Ngawang lungtok), 1970, Vol. 1 (Ka), pp. 412-451. (TBRC's Work Number: W19231)

3. ロレーパ作ツァンパギャレー伝

作品名：『法主リンポチェ、ツァンパギャレーの詩歌を伴った伝記』(*Chos rje rin po che gtsang pa rgya ras pa'i rnam thar mgur 'bum dang bcas pa*)

作者：ロレーパ・ワンチュク・ツンドウ (Lo ras pa dBang phyug brtson 'grus, 1187-1250)

著作年代：13世紀

エディション：(Leh edition) *Chos rje rin po che gtsang pa rgya ras pa'i rnam thar mgur 'bum dang bcas pa*. In *Dkar brgyud gser 'phreng: A Golden Rosary of Lives of Eminent Gurus*. Leh (Published by

Sonam W. Tashigang), 1970, pp. 270–293. (TBRC’s Work Number: 30123)

4. ギャルトンパ作ツァンパギャレー伝

作品名：『法主、衆生の守護者ツァンパギャレーの伝記』 (*Chos rje 'gro ba'i mgon po gtsang pa rgya ras kyi rnam par thar ba*)

作者：ギャルトンパ・デチエンドルジェ (rGyal thang pa bDe chen rdo rje, birth: 13世紀)

著作年代：13世紀

エディション：(Palampur edition) *Chos rje rin po che gtsang pa ye shes rdo rje'i rnam par thar pa*. In *Dkar brgyud gser 'phreng: A Thirteenth Century Collection of Verse Hagiographies of the Succession of Eminent Masters of the 'Brug-pa dKar-brgyud-pa Tradition*. Palampur: Sungrab Nyamso Gyunphel Parkhang, 1973, pp. 485–525. (TBRC’s Work Number: 23436)

(anonymous edition) *Chos rje 'gro ba'i mgon po gtsang pa rgya ras kyi rnam par thar ba* (TBRC’s Work Number: W1KG2849)<sup>4</sup>

5. マンガラバドラ作ツァンパギャレー伝

作品名：『主ツァンパギャレーの伝記』 (*rJe gtsang pa rgya ras kyi rnam thar*)

作者：レーベンデ・マンガラバドラ (Ra'i bande Mangala Bhadra, Ra bKra shis bzang po、13世紀以降あるいは15世紀以降)

著作年代：13世紀以降あるいは15世紀以降

エディション：(Bhutanese edition) *'Brug lugs gsung rab phyogs bsdebs las chos rje gtsang pa rgya ras kyi bka' 'bum glegs bam ka pa bzhugs so* and *'Brug lugs gsung rab phyogs bsdebs las chos rje gtsang pa rgya ras kyi bka' 'bum glegs bam kha pa bzhugs so* (Thimphu: The Bhutanese Monastic Body, 2011), vol. 2 (Kha), pp. 1.1–244.6. (Ladakhi edition) *The Collected Works (Gsuñ-Bum) of Gtsaṅ-pa Rgya-ras Ye-śes-rdo-rje: Reproduced from Rare Manuscripts and Blockprints Belonging to Various Lamas and Notables of*

---

<sup>4</sup> Anonymous edition は第一葉目 (Palampur edition の pp. 485.1–487.2に相当) を欠いている。

*Ladakh* (Darjeeling: Kargyud Sungrab Nyamso Khang, 1972), pp. 1–242. (TBRC's work number: 26076)

マンガラバドラ作のツァンパギャレー伝の奥書には、同伝記の作成の経緯が記されている。奥書によると、ツァンパギャレーの伝記には詳細版と要約版が多く存在したが、[1] ウリワ (dBu ri ba、すなわちローパ、1187-1250) がまとめて1つにした伝記と、[2] ゴムデ (sGom sde, no date) とタリ (sTag ri, no date) の2人が作った詩歌付きの伝記 (nam thar mgur 'bum) を基にして、ラルン寺の僧侶マンガラバドラ (Mang ga la bha dra)、すなわちタシサンポが作成した伝記ということになっている<sup>5</sup>。

マンガラバドラの年代そのものは特定できていないが、同伝記は、ウリワ (=ローパ) が作成した伝記に依っていることから、13世紀或いはそれ以降に作成されたことになる。また、もしゴムデが、ラルン寺第13代座主ゲルワンジェ (rGyal dbang rje Kun dga' dal 'byor, 1428-1476) の師のゴムデ・ワンチュク・ロドゥー (sGom sde dBang phyug blo gros, 14<sup>th</sup>/15<sup>th</sup>) であるならば、15世紀あるいはそれ以降に作成された伝記ということになる。

## 6. ペマカルポ作ツァンパギャレー伝

作品名：『衆生の守護者ツァンパギャレーの伝記：素晴らしい信仰の波の連なり』 ('Gro ba'i mgon po gtsang pa rgya ras pa'i nam par thar pa ngo mtshar dad pa'i rlabs phreng)

作者：ペマカルポ (Pad ma dkar po, 1527-1592)

作成年代：16世紀

エディション：(Darjeeling edition) 'Gro ba'i mgon po gtsang pa rgya ras pa'i

<sup>5</sup> *rJe gtsang pa rgya ras kyi nam thar* (B242.6-231.3): de nams hril gyis dril nas chos rje rin po che gTsang pa rgya ras pa'i nam thar skye rabs mgur 'bum dang bcas pa rgyas bsdu mang du yod na'ang / chos rje dBu ri bas phyogs gcig tu bsdebs pa dang sGom sde sTag ri gnyis kyi nam thar mgur 'bum 'ga' zhiig la brten nas / bdag Ra'i bande Mang ga la bla dras phyogs gcig tu bkod pa la / nor 'khrul nyes pa'i tshogs mchis na / chos bdag mkha' 'gro chos skyong nams dang mkhas pa chos kyi spyang dang ldan pa nams la bzod par gsol lo // 「それらを完全に集め、法主リンポチェであるツァンパギャレーの詩歌を備えた伝記・人物史には詳細なものと要約版がたくさんあったが、その中で、[1] 法主ウリワ (dBu ri ba) がまとめて1つにしたものと、ゴムデ (sGom sde) とタリ (sTag ri) の2人が作った *nam thar mgur 'bum* に依拠して、私レーベンデ・マンガラバドラ (Ra'i bande Mang ga la bha dra、ラルンの僧侶であるタシサンポ) が、まとめて作った〔この伝記〕において、間違いがたくさんあるならば、法主、ダーキニー、守護尊と、法の眼を持つ賢者たちに謝ります。」



*rnam par thar pa ngo mtshar dad pa'i rlabs phreng*. Darjeeling: Kargyud Sungrab Nyamso Khang, 1973–1974. (TBRC's work number: W10736, vol. 3)

(Kathmandu edition) *'Gro ba'i mgon po gtsang pa rgya ras pa'i rnam par thar pa ngo mtshar dad pa'i rlabs phreng*. Kathmandu: Gam po pa library, 2007/2013. (TBRC's work number: W1KG15852)

## 7. 匿名のツァンパギャレー伝

作品名：『法主リンポチェ、ツァンパギャレーの詩歌を伴った伝記』(*Chos rje rin po che gtsang pa rgya ras pa'i rnam thar mgur 'bum dang bcas pa*)

作者：不明

年代：不明

エディション：(Bhutanese edition) *'Brug lugs gsung rab phyogs bsdebs las chos rje gtsang pa rgya ras kyi bka' 'bum glegs bam ka pa bzhugs so* and *'Brug lugs gsung rab phyogs bsdebs las chos rje gtsang pa rgya ras kyi bka' 'bum glegs bam kha pa bzhugs so* (Thimphu: The Bhutanese Monastic Body, 2011), vol. 1 (Ka), Ka, pp. 1.1–53.6.

(Ladakhi edition) *The Collected Works (Gsun-Bum) of Gtsaṅ-pa Rgya-ras Ye-śes-rdo-rje: Reproduced from Rare Manuscripts and Blockprints Belonging to Various Lamas and Notables of Ladakh* (Darjeeling: Kargyud Sungrab Nyamso Khang, 1972), pp. 243–293. (TBRC's work number: 26076)

## 1 ツァンパギャレーの歴史的位置づけ

ツァンパギャレーの人物像および思想はどのように形成されていったのか。ここでは、以下の3つの視点からツァンパギャレーの位置づけを試みる。

1. ツァンパギャレーの前世の系譜
2. ツァンパギャレー死後の化身の系譜
3. カギユ派から支派たるドゥク派への師弟の系譜

## 1.1 ツアンパギャレーの前世の系譜

### マルトウン作ツアンパギャレー伝に記載される前世の系譜

マルトウン作ツアンパギャレー伝によると、ツアンパギャレーは、この閻浮提において4人目の生まれ変わりだとされる<sup>6</sup>。

- [1] ナーローパ (Nā ro pa)<sup>7</sup>
- [2] アシェーダナ (A shad dha na)<sup>8</sup>
- [3] ガンポパ (sGam po pa)<sup>9</sup>
- [4] ツアンパギャレー (gTsang pa rgya ras)<sup>10</sup>

### 匿名のツアンパギャレー伝に記載される前世の系譜<sup>11</sup>

匿名のツアンパギャレー伝によると、ツアンパギャレーは、この閻浮提において5人目の生まれ変わりだとされる。

- [1] ナーローパ (Nā ro pa)<sup>12</sup>
- [2] アシェーダナ (A shad dha na)<sup>13</sup>
- [3] 匿名の化身<sup>14</sup>
- [4] デウエージュンネー (bDe ba'i 'byung gnas)<sup>15</sup>
- [5] ツアンパギャレー<sup>16</sup>

<sup>6</sup> *Chos rje 'gro ba'i mgon po gtsang pa rgyal sras kyi rnam par thar ba* (414.1-415.3).

<sup>7</sup> *ibid* (414.1-4). ツアンパギャレーは、前世でカシュミールのコーサラにナーローパとして生まれ五明処を学んだとされる。ティーローパ (Te lo pa) のもとで12の大きな苦行を行い、成就を得たとされている。なお、ここでのコーサラとはコーサラ王国とは別の場所と考えられる。

<sup>8</sup> *ibid* (414.4-5). ツアンパギャレーは、前世で大成者カーラチャクラの瑜伽行者 (=大カーラチャクラパーダ) に弟子入りして学者になり、成就を得たとされる。

<sup>9</sup> *ibid* (414.5). ツアンパギャレーは、前世でガンポパとして生まれ、ミラレパに弟子入りし、特別な理解が生じたとされる。

<sup>10</sup> *ibid*, 414.5.4-451.3.

<sup>11</sup> *Chos rje rin po che gtsang pa rgya ras pa'i rnam thar mgur 'bum dang bcas pa*, B6.2-7.4.

<sup>12</sup> *ibid* (6.2-3). ツアンパギャレーは、前世でナーローパとして生きていた時に、五明処を学んだとされる。ティーローパ (Te lo pa) のもとで12の大きな苦行を行い、卓越した成就と普通の成就を得て、この系譜の偉大な始祖となったとされる。

<sup>13</sup> *ibid* (6.3-5). ツアンパギャレー、前世でアシェーダナすなわち小カーラチャクラ〔パーダ〕(Dus 'khor ba chung ngu) として生まれ、賢者として学習し、卓越した成就・普通の成就を得て、大成者として広く知られたとされている。

<sup>14</sup> *ibid* (6.5). アシェーダナの次の生まれ変わりについては、他の人が理解できないため説かれず、関係性が秘密にされている。

<sup>15</sup> *ibid* (6.5-6). 東の方角にある金の島に、将来自分の弟子になる悪行の王を調伏するために、デーウエージュンネーとして生まれ変わったとされている。

上述のマルトウンは、ガンポパをツァンパギャレーの前世だと認めていたが、匿名のツァンパギャレー伝ではガンポパは除かれている。代わりにデウエージュンネーなる人物が前世に加えられており、情報が異なる。マルトウンはツァンパギャレーの直弟子として、より正確な情報を知っていた可能性がある。その場合、匿名の化身とデウエージュンネーは後代に付記された情報である可能性も想定される。

### *lHo rong chos 'byung* に記載される前世の系譜

タツァク・ツェワンギェル (rTa tshag Tshe dbang rgyal, birth 15<sup>th</sup> cen.) 著 *lHo rong chos 'byung* (1446年作) の中では、ツァンパギャレーは閼浮提に生まれた4番目の化身とみなされている<sup>17</sup>。

- [1] ナーローパ (Nā ro pa)
- [2] シャダカ (Sha dha ka)
- [3] デウエージュンネー (bDe ba'i 'byung gnas)
- [4] ツァンパギャレー

ガンポパが含まれていない点と、デウエージュンネーが含まれている点は、匿名のツァンパギャレー伝と同様である。なお、第2世のシャダカは、匿名の伝記に出てくるアシェーダナと同一人物の可能性も考えられる。

### *lHo 'brug chos 'byung* に記載される前世の系譜

ゲンドウンリンチェン (Dge dun rin chen, 1926-1997) 著 *Lho 'brug chos 'byung* (1972年作) によれば<sup>18</sup>、インドのナーローパ、チベットのガンポパがツァンパギャレーの前世だと考えられている<sup>19</sup>。以上に挙げた文献のうち、ツァンパ

<sup>16</sup> *ibid* (6.6-7.2). その後 (ツァンパギャレーとしての生涯) は、このデウエージュンネーとしての生涯のようではなく、もっと大きな衆生の利益が生じるといわれる。

<sup>17</sup> *lHo rong chos 'byung*, 660.19-20.

<sup>18</sup> *lHo 'brug chos 'byung*, 97.9-14.

<sup>19</sup> *lHo 'brug chos 'byung* (97.9-14): dang po ni / de yang 'phags yul paṇ grub yongs kyi gtso bo paṇ chen Na'a ro ta pa dang / gangs can bka' brgyud kun gyi btsug rgyan mNyang med Dwags po lha rje gnyis kyi rnam 'phrul du byon par rtsod med lung gis grub pa'i don brgyud gdams pa'i mnga' bdag chos rje 'gro ba'i mgon po gTsang pa rgya ras zhes / 「1 番目 (=伝統の起こり方) とは、また、聖なる土地 (=インド) の学者・成就者すべての主たる大学者ナーロータパ (Na' ro ta pa) と、チベットの全てのカギユの比類なき冠たるニャンメー・タクボラジェ (=ガンポパ) という2人の化身となって、論争を超越し、経言によって証明される本当の系譜、口訣の保持者、法主、衆生の守護者たるツァンパギャレーと言われる。」

ギャレーの前世にガンポパを含めているのは、マルトゥン作ツァンパギャレー伝と *lHo 'brug chos 'byung* のみである。

## 小結

以上をまとめると、ツァンパギャレーの前世の系譜としては4つの伝統が確認できる。

- ・マルトゥン作のツァンパギャレー伝（計4名）  
ナーローパ⇒アシェーダナ⇒ガンポパ⇒ツァンパギャレー
- ・匿名のツァンパギャレー伝（計5名）  
ナーローパ⇒アシェーダナ⇒匿名の化身⇒デウエージュンネー⇒ツァンパギャレー
- ・*lHo rong chos 'byung*（計4名）  
ナーローパ⇒シャダカ⇒デウエージュンネー⇒ツァンパギャレー
- ・*lHo 'brug chos 'byung*（総人数は不明）  
ナーローパ⇒ガンポパ⇒ツァンパギャレー

ナーローパに始まりツァンパギャレーに至るという流れは、いずれの伝統にも共通であるが、両者の間を繋ぐ化身については相違を見せている。マルトゥン作のツァンパギャレーは *lHo 'brug chos 'byung* の伝承、匿名のツァンパギャレー伝は *lHo rong chos 'byung* の伝承と類似している点は注目に値する。

## 1.2 ツァンパギャレーの化身の系譜

続いてツァンパギャレー以降の化身の系譜に着目したい。ツァンパギャレーの次なる化身は、ドゥク派13代座主ゲルワンジェ・クンガペンジョル（rGyal dbang rje Kun dga' dpal 'byor, 1428-1476）であり、ツァンパギャレーとの間には200年以上の開きがある。化身ラマ制度を創設したのはカルマ・カギュ派で、第3代ランジュンドルジェ（1284-1339）の時代であるとされるが、同じカギュ派の分派であるドゥク派座主職に化身ラマ制度が採用されたのは、ゲルワンジェの時代、すなわち15世紀ということになる<sup>20</sup>。

ゲルワンジェの死後、ジャムヤム・チューキタクパ（'Jam dbyangs chos kyi grags pa, 1478-1523）が3代目の化身に認定され、4代目の化身ペマカルポ（Kun mkhyen Padma dkar po, 1527-1592）は一切知者（kun mkhyen）という称号を冠して呼ばれ、ドゥク派史上最高とされる大学者に成長した。

ペマカルポの死後、2名の化身候補者が現れた。1人はツァンパギャレーのギャ氏の血族である、ドゥク派第17代座主のシャプドゥン・ガワンナムゲル（Zhabs drung Ngag dbang rnam rgyal, 1594-1651）。もう1人は、チョンゲ家の領主の息子パクサムワンポ（dPag bsam dbang po, 1593-1641）である。ペマカルポの化身認定争いを鎮めるため、ツァンの摂政が介入し、最終的にパクサムワンポを化身と裁定した<sup>21</sup>。結果、シャプドゥン・ガワンナムゲルは、本山ラルン寺を出て西ブータンに拠点を移すことになり、ドゥク派は、北ドゥク派（Byang 'brug）と南ドゥク派（Lho 'brug）とに分裂した。

北ドゥク派は、パクサム・ワンポ以降も化身系譜が続き、現在は第12代ジクメー・ペマワンチェン（'Jigs med Padma dbang chen, 1963-）がインドのラダック地方を中心に活動し、環境問題などに精力的に取り組んでいる。

南ドゥク派は、シャプドゥン・ガワンナムゲルが「ドゥクユル」（'Brug yul）という国家を創設し、インドや西洋ではブータンと呼ばれるようになった<sup>22</sup>。シャプドゥンは歴史学的には1651年に没したことになっているが、代わりに、身・口・意の化身が誕生した。しかし、それぞれの系譜も次第に形骸化し途絶えていくことになる<sup>23</sup>。

他方、シャプドゥンが晩年に設置した摂政職（sde srid phyag mdzod pa）と大僧正職（rje mkhen po）はシャプドゥンの没後も引き継がれ<sup>24</sup>、1907年には摂政職が国王職に移行する形でワンチュク王朝が誕生した。ワンチュク王朝においても、シャプドゥン・ガワンナムゲルの定めのもと、国王と大僧正が政治と宗教を司るという同列体制は変わらなかった。2008年の民主化により、国家主権が国王から国民に移譲されたため、法律的には国王の政治的実権は放棄されたこ

<sup>20</sup> Sørensen and Haoran (forthcoming) によると、ドゥク派における化身制度の始まりは13世紀前半とのことである。ドルジェリンパ・センゲシェーラプ（rDo rje gling pa Seng ge shes rab, 1238-1287）やポキヤパ・センゲリンチェン（sPos skya pa Seng ge rin chen, 1258-1313）が、ダルマセンゲ（Darma seng ge Sangs rgyas dbon ras, 1177-1237）の化身と見なされた。

<sup>21</sup> 今枝2003: 45-47; Aris 1979: 206; Imaeda 2011: 34-36; Karma Phuntso 2013: 212-217.

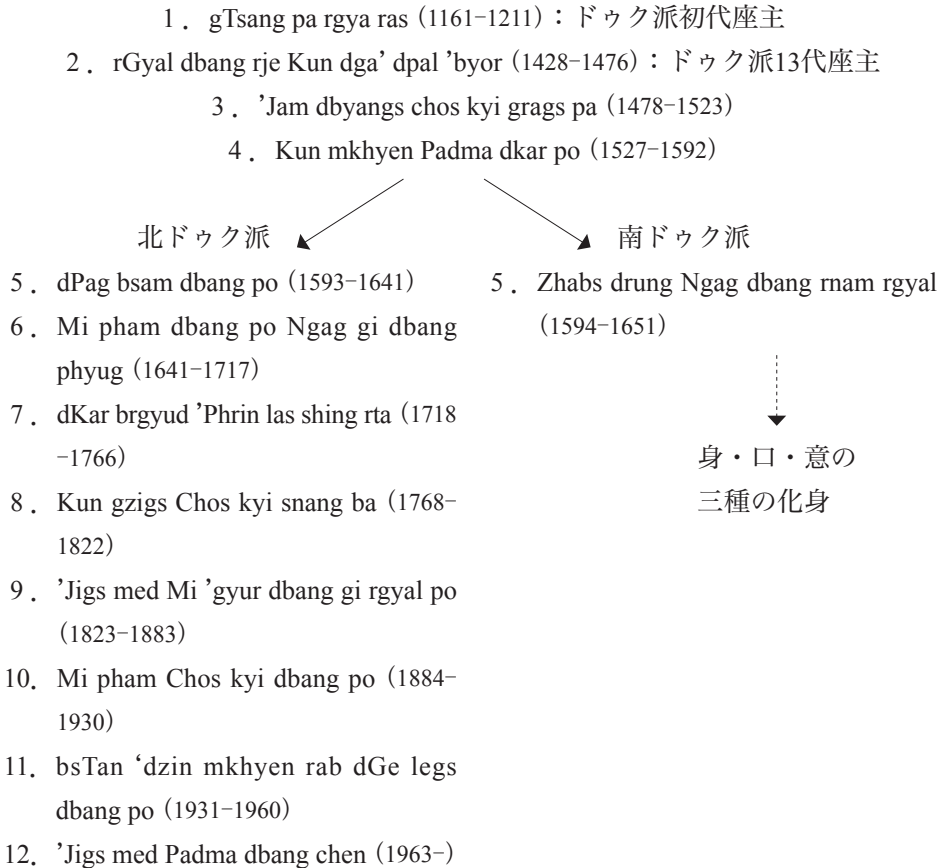
<sup>22</sup> Aris 1979: xxiv-xxv.

<sup>23</sup> 今枝2003: 179-182; Imaeda 2011: 162-165.

<sup>24</sup> 今枝2003: 77-80; Imaeda 2011: 67-70.

となる。しかし、ブータン国王は今なおブータン王国の象徴として、ブータン政府の運営の指針であり、国民の精神的支柱となっている。

● ツァンパギャレーの化身の系譜（rGyal dbang 'Brug pa）<sup>25</sup>



### 1.3 カギユ派からドゥク派への師弟の系譜

前節では、前世や化身という精神史的な流れについて確認した。本節では、師弟の系譜にもとづく法統の歴史における、ツァンパギャレーの位置づけについて概観する。

ドゥク派はガンポパの流れ、すなわち、タクポカギユ派の系譜に属する支派

<sup>25</sup> Ardussi (1977 : 548) をもとに作成。

である。マルパ (Mar pa Chos kyi blo gros, 1012-1097) からミラレーパ (Mi la ras pa, 1052-1135)、ガンボパ (sGam po pa bSod nams rin chen; Dwags po lha rje, 1079-1153) に伝わった法統が、パクモドゥパ (Phag mo gru pa rDo rje rgyal po, 1110-1170) からリンレーパ (gLing ras pa Padma rdo rje, 1128-1188) を経て、ツァンパギャレーへと伝わった。

ツァンパギャレーの建立したラルン寺 (Ra lung dgon pa) がドゥク派の本山になり<sup>26</sup>、ギャ氏一族が歴代座主となった。上述の通り、第13代座主のゲルワンジェ・クンガペンジョルがツァンパギャレーの第2代化身と認定されることになる。その後、第17代座主のシャプドゥン・ガワンナムゲルは、第4代化身ペマカルポの死後の化身認定に際しての混乱の中、拠点をラルン寺から西ブータンに移すことになる。北ドゥク派の伝統では、ツァンパギャレーの第5代の化身はパクサムワンポであるが、南ドゥク派の伝統では、シャプドゥンということになる。

### ●カギュ派からドゥク派への法統の流れ

1. マルパ・チューキロドゥ (Mar pa Chos kyi blo gros, 1012-1097)
2. ミラレーパ (Mi la ras pa, 1052-1135)
3. ガンボパ・ソナムリンチェン (sGam po pa bSod nams rin chen; Dwags po lha rje, 1079-1153)
4. パクモドゥパ・ドルジェギエルポ (Phag mo gru pa rDo rje rgyal po, 1110-1170)
5. リンレーパ・ペマドルジェ (gLing ras pa Padma rdo rje, 1128-1188)
6. ツァンパギャレー・イエシェードルジェ (gTsang pa rgya ras Ye shes rdo rje, 1161-1211)

### ●ドゥク派の座主の系譜<sup>27</sup> (\*今枝 2003: 280-282, 2011: 206-208)

1. ツァンパギャレー・イエシェードルジェ (gTsang pa rgya ras Ye shes rdo rje, 1161-1211)
2. ダルマセンゲ・サンギエーウォンレー (Darma Seng ge Sangs rgyas dbon ras, 1177-1237)
3. ションヌセンゲ (gZhong nu seng ge, 1200-1266)

<sup>26</sup> ほとんどの伝記と歴史書がラルン寺の建立年を明記していないが、デチェンドルジェ作の伝記のみ36歳 (1196年) という年代を提示している。*Chos rje 'gro ba'i mgon po gtsang pa rgya ras kyi rnam par thar ba* (A32.1-2; P518.7-519.2) を参照。

4. ニマセンゲ (Nyi ma seng ge, 1251-1287)
5. ポーキャパ・センゲリンチェン (sPos skya pa Seng ge rin chen, 1258-1313)
6. センゲギエルポ (Seng ge rgyal po, 1289-1326)
7. クンガセンゲ (Kun dga' seng ge, 1314-1347)
8. ロドゥーセンゲ (Blo gros seng ge, 1345-1390)
9. シェーラプ・センゲ (Shes rab seng ge, 1371-1392)
10. イエシェー・リンチェン (Ye shes rin chen, 1364-1415)
11. ナムカペルサン (Nam mkha' dpal bzang, 1398-1425)
12. シェーラプサンポ (Shes rab bzang po, 1400-1438)
13. ギエルワンジェ・クンガベンジョル (rGyal dbang rje Kun dga' dpal 'byor, 1428-1476)：ツァンパギャレーの2代目化身
14. ガワンチューギエル (Ngag dbang chos rgyal, 1465-1540)
15. ガワン・テンペギエルツェン (Ngag dbang bsTan pa'i rgyal mtshan, 1506-1538)
16. ミパム・チューキギエルポ (Mi pham Chos kyi rgyal po, 1543-1604)
17. シャブドゥン・ガワンナムギエル (Zhabs drung Ngag dbang nam rgyal, 1594-1651)：ツァンパギャレーの5代目化身

## 2 ツァンパギャレーの生涯と人物像

前章では、化身系譜およびカギユ派の法統系譜に沿って、ツァンパギャレーの歴史的な位置づけを特定してきた。本章では、ツァンパギャレーの生涯に焦点を当て、人物像とその特徴について整理を行う。

その際、ツァンパギャレーの伝記、そして、歴史書に見られるツァンパギャ

<sup>27</sup> ドゥク派の座主の数え方は研究者ごとに異なるが、本稿では、系譜を細かく記載している今枝 (2003 : 280-282, 2011 : 206-208) のものを使用する。例えば Ardussi (1977 : 560) はギャ氏の詳細な家系図とともにラルンの座主の系譜も記載しており、第4代ニマセンゲの後にドルジェリンパ・センゲシェーラプ (rDo rje gling pa Seng ge shes rab, 1238-1278) を、第16代ミパム・チューキギエルポの後にその息子 (シャブドゥンの父) であるミパム・テンペニマ (Mi pham bsTan pa'i nyi ma, 1567-1619) を加えている。しかし、今枝 (2003 : 47; 2011 : 36) によれば、*Lho'i chos 'byung* には、ミパム・チューキギエルポは息子のミパム・テンパではなく、孫のシャブドゥン・ガワンナムゲルに直接座主を譲ったと記載してある。この記述に従うならば、ミパム・テンペニマは座主の系譜から外すべきであろう。また、Karma Phuntsho (2013 : 212) では、第11代のナムカペルサンが抜けているが、ミパム・チューキギエルポの後にミパム・テンペニマが加えられていることから、シャブドゥン・ガワンナムギエルは第17代のままだが、ゲルワンジェ・クンガベンジョルは第12代座主と見做されている。



レーの生涯についての記述という2種類の資料を使用する。前者は、歴史書よりも多くの情報を提供するが、ドゥク派の僧侶たちが作成したものであるため、ドゥク派的な視点で記されていることになる。後者は、伝記に比べると情報量は少ないものの、ドゥク派に偏らないチベット仏教史的な視点で記されているため、情報の中立性が高いという利点がある。

本章では、以下に挙げる7種の伝記と、4種の歴史書および宗義書を使用し、資料の共通性、相違性に言及しながら、ツアンパギャレーの生涯について概観する。

### ● 7種の伝記

- [1] サンギェブム作ツアンパギャレー伝 (13世紀作)
- [2] マルトウン作ツアンパギャレー伝 (13世紀作)
- [3] ロレーパ・ワンチュクツンドウ作ツアンパギャレー伝 (13世紀作)
- [4] ギャルトンパ・デチェンドルジェ作ツアンパギャレー伝 (13世紀作)
- [5] マンガラバドラ作ツアンパギャレー伝 (13世紀以降か或いは15世紀以降)
- [6] ペマカルポ作ツアンパギャレー伝 (16世紀作)
- [7] 匿名のツアンパギャレー伝 (年代不明)

### ● 4つの歴史書／宗義書

- [1] タツァク・ツェワンギェル (rTa tshag Tshe dbang rgyal, 15世紀) 作 *lHo rong chos 'byung* (1446年作)
- [2] グーロツァワ・シヨンヌペル ('Gos lo tsa wa gZhon nu dpal, 1392-1481) 作 *Deb ther sngon po* (1476年作)
- [3] トウカン・ロサンチョキニマ (Thu'u bkwan Blo bzang chos kyi nyi ma, 1737-1802) 作 *Thu'u bkwan grub mtha'* (1802年作)
- [4] ゲンドウンリンチェン (dGe 'dun rin chen, 1926-1997) 作 *lHo 'brug chos 'byung* (1972年作)

## 2.1 ツアンパギャレーの生涯における主たる出来事

### ツアンパギャレーの誕生

ツアンパギャレーの生まれた時期、場所、家族構成などの情報については、いずれの伝記、歴史書においても記述に大きな相違はない。

ツァンパギャレーは、蛇年（1161年）の夏の最初の月（*dbyar zla ra ba*）の15日の朝に誕生したとされる。デチェンドルジェ作の伝記のみ、日付を「8日」としている<sup>28</sup>。

生まれた場所は、中央チベットのツァン地方東部の上ニャン地域（*Myang stod*）のハオカンサン山（*Ha 'o gangs bzang*）のふもとのクレ（*Khu le*）のサラル（*Sa ral*）にあるギャ（*rGya*）一族の村とされている。

ツァンパギャレーは、父ギャスルポツァペ（*rGya zur po tshab pe*）<sup>29</sup>と母マルサタルキー（*Mar za dar skyid*）との間に、7人息子の末っ子として誕生した。名前はユンドウンペル（*g-Yung drung dpal*）と付けられたが、家族や村人たちからはペルナク（*dPal nag*）という愛称で呼ばれた。

### ツァンパギャレーの家族構成

上述の通り、父はギャスルポツァペ（*rGya zur po tshab pe*）と母はマルサタルキー（*Mar za dar skyid*）である。*lHo 'brug chos 'byung*によれば、6名の兄はラニエン（*Lha gnyan*）、ラブム（*Lha 'bum*）、ケルデン（*sKal ldan*）、ジョツル（*Jo tshul*）、ゴムペー（*sGom pad*）<sup>30</sup>、マンツェン（*Mang btsan*）とされる<sup>31</sup>。

### ボン教の影響

ツァンパギャレーの一族は、ボン教との関係が強かったものと思われる。ツァンパギャレーの誕生後、仏教僧とボン教僧の両者が彼の儀礼、育成、教育に携わったとされる。

兄弟の中では、兄ケルデンがツァンパギャレーの主たる教育係であったと考えられる。ケルデンは規範師ボン（*slob dpon Bon*）のもとにツァンパギャレーを連れて行き、ツァンパギャレーは規範師ボンのもとで幼少期の学習を行った。ツァンパギャレーは仏教徒として出家した後にも、規範師ボンとの関係を続け、彼から多くを学んでいる。名前から推測するに、規範師ボンはボン教徒であったと考えられるが、ツァンパギャレーに対して仏教教育を行ったという

<sup>28</sup> *Chos rje 'gro ba'i mgon po gtsang pa rgya ras kyi rnam par thar ba*, A8.3; P492.7.

<sup>29</sup> サンギェーブム作の伝記ではギャスルソツァペ（*rGya zur so tshad dpe*）とされる。*Chos rje gtsang pa rgya ras kyi rnam par thar* (P401.6; T383.2).

<sup>30</sup> マンガラバドラ作の伝記ではゴンパ（*sGom pa*）とされている。*rJe gtsang pa rgya ras kyi rnam thar* (B28.2; L27.4).

<sup>31</sup> *lHo 'brug chos 'byung*, 98.12-14. 但し、6名の兄のうち、ラブムとマンツェンの名前は伝記の中に確認されない。

記述はあるものの、ボン教教育に関する記述は確認されないため、仏教のみを教育していた可能性が高い。事実、ツァンパギャレーの著作のうちボン教をテーマとするものは存在せず、彼の著作中にボン教的な思想や情報は出てこない。すなわち、ツァンパギャレーは、ボン教のラマから仏教を学んでいたということになる。

### 幼少期の逸話

何れの伝記や歴史書も、ツァンパギャレーは、高貴で見た目も美しく、賢く、人格的にも模範的な子供であったと述べている。また、寺を建てたり、説法をしたり、菩薩行を通じて人々を喜ばせたといったエピソードが挙げられていることから、ツァンパギャレーが優秀で、人格も良く、僧侶となる資質に恵まれた人物であったことが分かる。

### 母のエピソード

各伝記や歴史書において、概してツァンパギャレーは、父母、家族、親戚全員から好かれていたとされるが、*Deb ther sngon po* (青史)によれば、父親は、息子が多かったためにツァンパギャレーを取り立てて可愛がらなかったことになっている<sup>32</sup>。他の伝記や歴史書では、父も母親同様、ツァンパギャレーを可愛がっていたことにはなっているが、父に関する記述は極めて少ない。他方、ツァンパギャレーの誕生する際には、母親が多くの吉祥な兆候を体験していたことなど、母親に関する肯定的な記述は極めて多い。恐らく、父親よりも母親の方がツァンパギャレーの人格形成に大きな影響を与えていたものと推測される。

母親が亡くなったのはツァンパギャレーが8歳の時(1168年)であったと大半の伝記と歴史書が述べているが<sup>33</sup>、デチェンドルジェ作のツァンパギャレー伝<sup>34</sup>、マンガラバドラ作ツァンパギャレー伝のラダック版<sup>35</sup>、*lHo rong chos 'byung*<sup>36</sup>は、7歳の時(1167年)としている。

<sup>32</sup> Chandra 1974: 580.7-581.1.

<sup>33</sup> サンギェーブム作の伝記: *Chos rje gtsang pa rgya ras kyi rnam thar* (P403.4-5; T384.6-385.1)、マンガラバドラ作の伝記のブータン版: *rJe gtsang pa rgya ras kyi rnam thar* (B5.4)、ペマカルポ作の伝記: *'Gro ba'i mgon po gtsang pa rgya ras pa'i rnam par thar pa ngo mtshar dad pa'i rlabs phreng* (D12.1; K10.10-11)、*Deb ther sngon po*: Chandra (1974: 581.1) を参照。

<sup>34</sup> *Chos rje 'gro ba'i mgon po gtsang pa rgya ras kyi rnam par thar ba* (A10.3-4; P495.3-4).

<sup>35</sup> *rJe gtsang pa rgya ras kyi rnam thar*, L6.2.

## 出家

ツァンパギャレーという名前は、「ツァン出身のギャ氏のレーパ」、すなわち綿布一枚を纏った隠遁瞑想者という意味であり、その名前から判断するに、在家の密教修行者としてのイメージが強い。しかし、ツァンパギャレーは出家僧としての側面も持ち続けた。

彼の出家年については伝記や歴史書ごとに情報が異なるが<sup>37</sup>、大よそ12歳前後に出家したと考えられる。サンギェーブム作の伝記、マルトゥン作の伝記は11歳時説（1171年説）を主張し、ロレーパ作の伝記は11～12歳時説（1171～1172年説）を主張し、マンガラバドラ作の伝記、ペマカルポ作の伝記、匿名の伝記は12歳時説（1172年説）を主張する。

なお、剃髪者について多くの伝記はタタンパ（rTa thang pa）<sup>38</sup>だと述べているが、デチェンドルジェ作の伝記とマンガラバドラの伝記のみ剃髪者を規範師ボンとしている。また、*Lho rong chos 'byung* は、ツァンパギャレーは12歳（1172年）の時に規範師ボンのもとで出家し、翌年（1173年）、13歳の時にタタンパのもとで出家したと記している。すなわち、最初に規範師ボンのもとボン教徒として出家したのち、タタンパのもとで仏教徒として出家し直したものと考えられる。

また、出家名については2つの呼び名がある。サンギェーブム作の伝記、マルトゥン作の伝記、ロレーパ作の伝記、ペマカルポ作の伝記は、*Shes rab bdud rtsi 'khor lo* としている。他方、マンガラバドラ作の伝記、*lHo rong chos 'byung*、*Thu'u bkwan grub mtha'* は *Shes rab dpal* としている。両者のうち正式名は *Shes rab bdud rtsi 'khor lo* であろう。*Shes rab dpal* は略称であり、出家名 *Shes*

<sup>36</sup> *lHo rong chos 'byung*, 646.3-6.

<sup>37</sup> 出家年、出家名、剃髪者の情報について、サンギェーブム作の伝記：*Chos rje gtsang pa rgya ras kyi nram thar* (P403.6-7; T385.2-3)、マルトゥン作の伝記：*Chos rje 'gro ba'i mgon po gtsang pa rgyal sras kyi nram par thar ba* (417.3)、ロレーパ作の伝記：*Chos rje rin po che gtsang pa rgya ras pa'i nram thar mgur 'bum dang bcas pa* (273.5-6)、マンガラバドラ作の伝記：*rJe gtsang pa rgya ras kyi nram thar* (B6.1-2; L6.4-5)、ペマカルポ作の伝記：*'Gro ba'i mgon po gtsang pa rgya ras pa'i nram par thar pa ngo mtshar dad pa'i rlabs phreng* (D12.1-2; K 10.12-15)、匿名の伝記：*Chos rje rin po che gtsang pa rgya ras pa'i nram thar mgur 'bum dang bcas pa* (B8.1; L250.4)、*lHo rong chos 'byung* (646.15-16) を参照。

<sup>38</sup> 今枝（2003：60-61）によると、上ニヤンのタタンの地域に、ニンマ派、カギュ派、サキャ派の教義に明るいベルデン・シェーラプ（dPal ldan shes rab）という人物がおり、タタンパと呼ばれていた。

rab bdud rtsi 'khor lo と俗名 g-Yung drung dpal とを統合し、便宜的に短く呼んだ名前ではないかと推測される。

## 出家後の学習

出家以降、ツアンパギャレーは様々なゲシェーやラマに師事し、顕教および密教を学習した。ラマから習った科目としては、密教や瞑想、儀軌が多い。その一方で、論理学、中観、般若など、顕教も多く学んでいる。ツアンパギャレー著作集の内容(表1)を見ても、顕教・密教の両方に通じていたことが良くわかる。

なお、ゾクチェンの学習についても多くの記述が存在するが、著作集の中にゾクチェンに関するものは確認されない。教養としてゾクチェンを学んだものの、カギュ派に所属する論師として、他学派の奥義については著述しなかったのかもしれない。また、上述の通り、ツアンパギャレーは、ボン教のラマである規範師ボンのもとで学習をしたが、ボン教教義を学習したという記述はなく、当然、ボン教に関する著作も存在しない。

ツアンパギャレーが密教に通じていたことは言うまでもないが、彼が顕教にも通じていた事例として、ここでは師リンレーパとの問答について紹介しておきたい<sup>39</sup>。

---

<sup>39</sup> *rJe gtsang pa rgya ras kyi rnam thar* (B14.6-15.4; L14.6-15.4): dGe bshes dar rdor dang Klog 'don la sogs pa thugs shes rab che ba nams kyis bgro gleng la sogs par ma thub pas shes rab che bar grags so // tshogs gral zhig tu rje sNa phu ba'i zhal nas / khyed kyis nga la chos shig dris dang gsungs / de mi mchi bla ma la thal 'gyur phog na mi rung zhus pas / de ngas gnang ba byin pa yin mod / thal 'gyur phog na 'khol gsungs / 'o na chos sku'i mtshan nyid cig gzhas par zhu dang zhus pas / skye 'gag gnas gsum dang bral ba zhig yin gsungs / rjes 'o na nam mkha' 'di yang chos skur thal zhus pas / spobs pa lan med du song nas khyed shes rab can du 'dug gsungs te shin tu mnyes nas phyag sbyar ro // de phyin chad mched grogs dang bgro gleng bya ma dgos gsungs / [ツアンパギャレーは、] ゲシェー・タルドル (dGe bshes dar rdor) とロクドン (Klog 'don) など、知恵の大きい方たちとの問答などで、[彼らはツアンパギャレーに] 勝てなかったので、[ツアンパギャレーは] 知恵の大きい方として知られている。ある座列にて主ナブワ (=リンレーパ) は、「あなたは私に仏法に関する質問をしてみなさい」と仰った。[ツアンパギャレーは、] 「それ (=質問) はありません。ラマに帰謬を与えるのは良くありません」と申し上げたので、[リンレーパは] 「それ (=その質問) は私が許可を与えたものであるので、帰謬を与えても良い」と仰った。[ツアンパギャレーは、] 「ならば、法身の定義を出してください」お願いしたところ、[リンレーパは] 「[法身の定義とは、] 生・滅・住の3つがないものである」と仰った。主 (=ツアンパギャレー) は、「そうであるならば、この虚空も法身となってしまう」と申し上げたところ、自信のある答えがなくなってから、[リンレーパはツアンパギャレーに対して] 「あなたは知恵を持つ人だ」と仰り、大変お喜びになって、合掌なさった。[リンレーパはツアンパギャレーに対して、] 「これから兄弟弟子たちと問答をすべきでない」と仰った。

或る日、ツァンパギャレーはリンレーパから問答をしようと持ちかけられる。ツァンパギャレーは師に対して失礼があつてはいけなと断つたが、リンレーパは質問をするよう命じた。そこで、ツァンパギャレーはリンレーパに法身の定義とは何かを問うた。リンレーパが「法身の定義とは、生・滅・住の3つがないもの（*skye 'gag gnas dang bral ba*）である」と答えたのに対し、ツァンパギャレーは「その場合、虚空も法身になってしまう」と帰謬を指摘。リンレーパは自身の誤謬を認めてツァンパギャレーを一層高く評価し、以後、トラブルを避けるため兄弟弟子と問答しないよう忠告したとされる。このエピソードから、ツァンパギャレーの顕教学僧としての優秀さ、師リンレーパの謙虚さ、さらには他の僧侶たちとの人間関係の複雑さを垣間見ることができる。

### リンレーパへの師事

ツァンパギャレーの根本の師（*rtsa ba'i bla ma*）はリンレーパである。リンレーパのもとで学習を始めた時期については諸説存在するが、おおよそ21歳から23歳頃である。マルトゥン作の伝記、デチェンドルジェ作の伝記では、21歳（1181年）の時にリンレーパに弟子入りして学習を開始したと伝えられている<sup>40</sup>。*lHo rong chos 'byung* と *Deb ther sngon po* では、22歳（1182年）でリンレーパと出会い口訣を受けたとされている<sup>41</sup>。サンギェーブム作の伝記、ロレーパ作の伝記、ペマカルポ作の伝記、匿名の伝記、*lHo 'brug chos 'byung* では、23歳（1183年）でリンレーパに師事したことになっている<sup>42</sup>。

リンレーパがツァンパギャレーを高く評価し寵愛していたことは、上述の問答のエピソードからも明らかである。入門時から、リンレーパはツァンパギャレーを真剣に教育した。当時、リンレーパたちがナブ寺を建てるための大工仕事を行っていたのを見て、罰金を支払うことで大工仕事を免除してもらい、空いた時間でペチャを書かせて欲しいとリンレーパに依頼した。その際、リン

<sup>40</sup> マルトゥン作の伝記：*Chos rje 'gro ba'i mgon po gtsang pa rgyal sras kyi nram par thar ba* (420.1-423.5)、デチェンドルジェ作の伝記：*Chos rje 'gro ba'i mgon po gtsang pa rgya ras kyi nram par thar ba* (A18.1-2; P503.5-6) を参照。

<sup>41</sup> *lHo rong chos 'byung* (647.8-10)、*Deb ther sngon po* (Chandra 1974: 581.5) を参照。

<sup>42</sup> サンギェーブム作の伝記：*Chos rje gtsang pa rgya ras kyi nram thar* (P406.3-5; T387.6-7)、ロレーパ作の伝記：*Chos rje rin po che gtsang pa rgya ras pa'i nram thar mgur 'bum dang bcas pa* (274.3)、ペマカルポ作の伝記：*'Gro ba'i mgon po gtsang pa rgya ras pa'i nram par thar pa ngo mtshar dad pa'i rlabs phreng* (D17.5; K16.2)、匿名の伝記：*Chos rje rin po che gtsang pa rgya ras pa'i nram thar mgur 'bum dang bcas pa* (B9.1-4; L251.4-252.1)、*lHo 'brug chos 'byung* (99.11-13) を参照。



レーパは怒り大工仕事を辞めさせないと宣言し、ツァンパギャレーは反省した。その後、リンレーパは、大工仕事をしながらでもペチャを書く時間はあるから急がなくとも良い、とツァンパギャレーを諭した。このように、入門時からツァンパギャレーに対する熱意ある指導が行われていた。

後に、ツァンパギャレーはしばしば瞑想に出かけたいとリンレーパに請うたが、リンレーパは中々許可を与えなかった。しかし、ツァンパギャレーの再三に渡る要請により、最終的に瞑想に出かけることを許可し、ツァンパギャレーに全ての口訣を与えた。しかし、そのことが後にツァンパギャレーの大きな後悔を生むことになる。

28歳（1188年）の時、ツァンパギャレーがロダク地方のカルチュに瞑想に出かけた帰路、リンレーパが死去したことを知らされ、急いでリンレーパのもとに戻った<sup>43</sup>。彼は師の願いに反して瞑想に出かけた結果、師の死に目に会えなかったことを強く後悔し、懺悔の詩歌を作っている。

## 比丘戒の授戒

ツァンパギャレーが比丘になった年（1193年／33歳時）は、ほぼ全ての伝記、歴史書で一致が見られる<sup>44</sup>。デチェンドルジェ作の伝記のみ、18歳（或いは20歳以前）で比丘になったことになっている<sup>45</sup>。

戒師については諸説存在する。サンギェーブム作の伝記、マンガラバドラ作

<sup>43</sup> サンギェーブム作の伝記：Chos rje gtsang pa rgya ras kyi rnam thar (P414.3; T395.2-3)、マルトゥン作の伝記：Chos rje 'gro ba'i mgon po gtsang pa rgyal sras kyi rnam par thar ba (424.2-4)、マンガラバドラ作の伝記：rJe gtsang pa rgya ras kyi rnam thar (B16.6; L16.6)、ペマカルポ作の伝記：'Gro ba'i mgon po gtsang pa rgya ras pa'i rnam par thar pa ngo mtshar dad pa'i rlabs phreng (D27.3; K25.13-14)、匿名の伝記：Chos rje rin po che gtsang pa rgya ras pa'i rnam thar mgur 'bum dang bcas pa (B13.3-14.1; L255.6-256.2)、lHo 'brug chos 'byung (649.15-19) を参照。なお、ロレーパ作の伝記：Chos rje rin po che gtsang pa rgya ras pa'i rnam thar mgur 'bum dang bcas pa (276.6)、デチェンドルジェ作の伝記：Chos rje 'gro ba'i mgon po gtsang pa rgya ras kyi rnam par thar ba (A27.2-4; P513.5-7) はリンレーパの死については言及するが、没年について記載なし。

<sup>44</sup> 比丘戒の授戒に関する情報については、サンギェーブム作の伝記：Chos rje gtsang pa rgya ras kyi rnam thar (P420.5-6; T401.2-3)、マルトゥン作の伝記：Chos rje 'gro ba'i mgon po gtsang pa rgyal sras kyi rnam par thar ba (432.2-4)、ロレーパ作の伝記：Chos rje rin po che gtsang pa rgya ras pa'i rnam thar mgur 'bum dang bcas pa (279.6-280.1)、マンガラバドラ作の伝記：rJe gtsang pa rgya ras kyi rnam thar (B24.6-25.1, 98.1; L24.2-3, 94.6-95.1)、ペマカルポ作の伝記：'Gro ba'i mgon po gtsang pa rgya ras pa'i rnam par thar pa ngo mtshar dad pa'i rlabs phreng (D60.5-6; K57.8-10)、lHo 'brug chos 'byung (653.8-11)、Deb ther sgon po (Chandra 1974: 584.3-4)、Thu'u bkwan grub mtha' (128.4)、lHo 'brug chos 'byung (100.8-9) を参照。但し、Thu'u bkwan grub mtha' は授戒年の記載なし。

<sup>45</sup> Chos rje 'gro ba'i mgon po gtsang pa rgya ras kyi rnam par thar ba (A14.7-15.5; P500.1-6)。

の伝記では、比丘戒をセーパ（bZad pa）から受けたことになっている。マルトゥン作の伝記、ロレーパ作の伝記、*lHo 'brug chos 'byung* では、比丘戒をラマシャン（bLa ma Zhang g-Yu brag pa brTson 'grus brags pa, 1122-1193）から受けたことになっている。*lHo rong chos 'byung* では、比丘戒をセーパとラマシャンの両方から受けたことになっている。ペマカルポ作の伝記、*Deb ther sngon po* では、沙弥戒をセーパから、比丘戒をラマシャンから受けたとされている。

### ロンドル寺の建立

いずれの伝統においても、ロンドル（Klong rdol）寺はラマシャンの予言に基づいて建立されたことになっている<sup>46</sup>。他方、建立年には諸説存在する。デチェンドルジェ作の伝記および *Deb ther sngon po* は29歳説（1189年説）、マンガラパドラ作の伝記は33歳説（1193年説）、マルトゥン作の伝記およびロレーパ作の伝記は34歳説（1194年説）を主張する<sup>47</sup>。いずれの年代にせよ、初期に建立された寺院ということになる。

### ラルン寺の建立

ドゥク派の本山であるラルン（Ra lung）寺は、ツァンパギャレーの故郷の近く、上ニャン地域の東端、ロカ地方との境に存在するが、伝記や歴史書によれば守護尊（yi dam）の予言に基づいて建立されたとされる<sup>48</sup>。元タリンレーパがラルン滞在時に使用していた小さな庵を、後に、ツァンパギャレーが僧院として建て直し、ドゥク派の本山となったものと推測される<sup>49</sup>。ほとんどの伝記、歴史書は、ラルン寺の建立年について言及しないが、ギャルタンバ作の伝記のみが1196年（36歳の時）という年代を提示している<sup>50</sup>。この説に従えば、ロンドル寺を建立した後にラルン寺が建立されたことになる。

<sup>46</sup> ロンドル寺建立については、マルトゥン作の伝記：*Chos rje 'gro ba'i mgon po gtsang pa rgyal sras kyi rnam par thar ba* (432.6-433.1)、ロレーパ作の伝記：*Chos rje rin po che gtsang pa rgya ras pa'i rnam thar mgyur 'bum dang bcas pa* (280.2-3)、デチェンドルジェ作の伝記：*Chos rje 'gro ba'i mgon po gtsang pa rgya ras kyi rnam par thar ba* (A31.5-7; P518.4-6)、マンガラパドラ作の伝記：*rJe gtsang pa rgya ras kyi rnam thar* (B24.6; L24.2)、*Deb ther sngon po*: Chandra (1974: 584.2) を参照。

<sup>47</sup> ロレーパ作の伝記の結論部の総括では33歳で出家してロンドル寺を建立したと述べられており、伝記の本論中に提示される34歳説とは1年ずれている点に注意が必要である。また *Thu'u bkwan grub mtha'* (128.12-13) には建立年の記載がない。

<sup>48</sup> ラルン寺建立については、ギャルタンバ作の伝記：*Chos rje 'gro ba'i mgon po gtsang pa rgya ras kyi rnam par thar ba* (A32.1-2; P518.7-519.2)、*Thu'u bkwan grub mtha'* (128.13-14) を参照。



## ドゥク寺の建立

ドゥク派の宗派名の起源ともなるドゥク寺（'Brug gi dgon pa 或いは 'Brug Se ba byang chub chos gling）は、ラサの近郊、南西方向に位置しているが、伝記や歴史書によれば師リンレーパの予言にもとづいて建立されたとされる<sup>51</sup>。建立年については45歳説（1205年説）が一般的であるが、*Deb ther sngon po* のみ33歳時説（1193年説）を主張している<sup>52</sup>。多数派の45歳説に従えば最晩年に建立された寺院ということになる。

## ツァンパギャレーの死

ツァンパギャレーは晩年になっても教化活動を続け、多くの遺言も残している。葬儀の際には数万人の弟子が集まったとの記述が各伝記に存在することから、布教活動に成功し、人望も厚かったことと推察される。

<sup>49</sup> Ardussi (1977: 108). なお、Miller (2005: 377) は、リンレーパとツァンパギャレーが共同して (jointly) ラルン寺を建てたと述べているが、文献的根拠が挙げられていない。リンレーパとツァンパギャレーが共同できた期間は、21歳（1181年）から23歳（1183年）頃のリンレーパへの入門時から、リンレーパの亡くなった1188年までの数年間の間ということになるが、本稿で参照した7種のツァンパギャレー伝において、その期間中にラルン寺を建立したという記述はない。他方、本文で述べる通り、ギャルトンバ作の伝記では1196年（36歳時）にラルン寺が建立されたことになっている。

<sup>50</sup> ラルン寺の建立年については、Snellgrove (1968: 137)、Martin 1979: 67 footnote 34、Karma Phuntso (2013: 210) など、多くの研究者が1180年（すなわちツァンパギャレー20歳）を採用しているが、いずれも典拠が不明である。恐らく、Snellgrove 説を無批判に踏襲しているものと考えられる。しかし、1180年という年代は不自然である。20歳といえばリンレーパに出会ってカギユの口訣を受ける前であり、また、僧院を建立するにしても20歳は早過ぎる。各伝記におけるツァンパギャレーによる諸寺建立は、ツァンパギャレーが出家した33歳（1193年）以降である。なお、今枝 (2003: 35, 2011: 20) は、ラルン寺に関しては、その創設の年代を明記する資料がないと述べている。

<sup>51</sup> ドゥク寺建立については、サンギェーブム作の伝記: *Chos rje gtsang pa rgya ras kyi nram thar* (P436.6; T416.7)、ローレーパ作の伝記: *Chos rje rin po che gtsang pa rgya ras pa'i nram thar mgur 'bum dang bcas pa* (290.1-2)、マンガラバドラ作の伝記: *rJe gtsang pa rgya ras kyi nram thar* (B194.6-195.1; L191.1)、ペマカルボ作の伝記: *'Gro ba'i mgon po gtsang pa rgya ras pa'i nram par thar pa ngo mtshar dad pa'i rlabs phreng* (D80.5-82.1; K76.7-77.12)、*Deb ther sngon po*: Chandra (1974: 584.5)、*Thu'u bkwan grub mtha'* (128.14) を参照。なお、*Thu'u bkwan grub mtha'* (128.12-13) には建立年の記載がない。なお、Smith (1968)、中井 (1970: 779)、Aris (1979: 172) は1189年説を主張するが、一次資料を典拠として挙げていない。

<sup>52</sup> ドゥク寺の建立年について、Snellgrove (1968: 137) や Martin (1979: 67 footnote 34) など西洋の多くの研究者は、ツァンパギャレーの諸伝記に記載される45歳説（1205年）ではなく、*Deb ther sngon po* の33歳時説（1193年）を採用する者が多い。また、Aris (1979: 172) は、ドゥク寺の建立年を1189年頃としているが根拠は不明である。

ツァンパギャレーの没年（1211年／51歳時）、没日（25日）、時間帯（夕方・夜）については異説が存在しないが、没月については異説が存在する<sup>53</sup>。

*lHo rong chos 'byung* は「夏の2番目の月」（*dbyar zla 'bring po*）を主張するが、「或る人は秋の2番目の月（*ston zla 'bring po*）とする」という異説も紹介している。*Deb ther sngon po* は「夏の最後の月」（*dbyar zla tha chung*）、サンギェーブム作の伝記および *lHo 'brug chos 'byung* は「秋の1番目の月」（*ston zla ra ba*）、マンガラバドラ作の伝記およびペマカルボ作の伝記は「秋の2番目の月」（*ston zla 'bring po*）を主張する。すなわち、各伝承には4か月の時間幅が存在する。これらの中で一番古い伝承は、サンギェーブムの「秋の1番目の月」ということになる。

## 2.2 ツァンパギャレーの活動地域

前節ではツァンパギャレーの生涯について概観した。最後に、ツァンパギャレーの活動地域を地理的に概観しておきたい。

ツァンパギャレーの故郷は、ツァン地方東部の上ニャン地域（*Myang stod*）である。ドゥク派の本山となるラルン寺は、上ニャン地域の東端、ツァン地方とロカ（*lHo kha*）地方の境界線近くに建てられた。

ツァンパギャレーは、レーパとして度々、山岳地域に籠って瞑想修行を行っていた。主な瞑想地は、ロダク地方のカルチュ（*mKhar chu*）、そしてロカ地方の東端にあるツァリ（*Tsa ri*）である。

一方で、ラサ近郊にもしばしば出かけ、中央チベットの僧侶たちとも積極的に交流を進めていた。ドゥク派の宗派名のもとにもなったドゥク寺は、ラサの南西側に位置し、中央チベットにおけるドゥク派の拠点であったと思われる。同寺院の建立は45歳の時（1205年）<sup>54</sup>であり、中央チベットに拠点を持つことが

<sup>53</sup> ツァンパギャレーの死については、サンギェーブム作の伝記：*Chos rje gtsang pa rgya ras kyi rnam thar* (P449.7; T429.5)、マルトゥン作の伝記：*Chos rje 'gro ba'i mgon po gtsang pa rgyal sras kyi rnam par thar ba* (449.5-450.1)、ロレーパ作の伝記：*Chos rje rin po che gtsang pa rgya ras pa'i rnam thar mgur 'bum dang bcas pa* (290.2-292.1)、デチェンドルジェ作の伝記：*Chos rje 'gro ba'i mgon po gtsang pa rgya ras kyi rnam par thar ba* (A37.6-7; P525.1-2)、マンガラバドラ作の伝記：*rJe gtsang pa rgya ras kyi rnam thar* (B240.2-4; L238.1-3)、ペマカルボ作の伝記：*'Gro ba'i mgon po gtsang pa rgya ras pa'i rnam par thar pa ngo mtshar dad pa'i rlabs phreng* (D101.1; K95.12-13)、匿名の伝記：*Chos rje rin po che gtsang pa rgya ras pa'i rnam thar mgur 'bum dang bcas pa* (B44.6-45.1; L284.5-6)、*lHo rong chos 'byung* (661.6)、*Deb ther sngon po*:Chandra (1974: 585.2)、*lHo 'brug chos 'byung* (105.1-4)を参照。但し、ロレーパ作の伝記には、月についての言及がない。

<sup>54</sup> 前述のとおり *Deb ther sngon po* のみ33歳説を主張する。

できたのは最晩年ということになる。ツァンやロダクで活躍していたツァンパギャレーが、晩年になり中央チベットでも拠点を持つことが出来るほど認知度が高まっていたといえよう。

### 3 結論

本稿では、ツァンパギャレーの歴史的 position を特定したのち、7種の伝記と4種の歴史書・宗義書を比較検討した。

#### ツァンパギャレーの人物的特徴

ツァンパギャレーは、人物的特徴として、[1] 密教行者的側面、[2] 顕教学僧的側面、[3] 教育者の側面、さらには[4] 文化人・詩人的側面を有していたことが分かる。これらの側面は、伝記に記されているだけでなく、彼の著作一覧を見ても確認できる。

ツァンパギャレーという名前から、彼がレーパとして、綿布（レー）一枚をまとして山中で隠遁瞑想生活を送るような人物であったことは容易に想像できる。実際、ツァリやカルチュ付近でしばしば隠遁瞑想を行っていた。すなわち彼は「密教行者的側面」を持っていたことになる。

他方、ツァンパギャレーが、密教だけでなく「顕教学僧的側面」を持っていたことは、彼の若き日の学習内容を見れば一目瞭然であるし、リンレーパとの問答に勝利したというエピソードは、その性格をより強く裏付ける。

また、中央チベットの中心地、ラサ近郊の寺院をしばしば訪れたり、僧侶たちに招待されて、口訣を与えていたことから、僧侶に対する教育を行っていたことが分かる。それだけでなく、王宮や村々、道中などで、領主から村人、放牧民に至るまで、身分の上下を問わず、在家者たちとも積極的に交流、啓蒙教育を行っていたことも伝記の内容から特定できる。よって、ツァンパギャレーは、聖俗の両面において「教育者の側面」を持っていたことになる。

また、ツァンパギャレーの伝記に、多数の詩歌（mgur 'bum）が組み込まれていることから、彼が「詩人的側面」を持っていたことも確認出来る。

#### 文献間の情報の相違について

なお、伝記や歴史書間で一致する情報と相違する情報が存在する。そのうち、一致する情報については史実である可能性が高い。もちろん、最初の伝承

そのものが誤りである可能性も排除できない。他方、一致しない情報については史実の再検討が必要となる。13世紀に直弟子が作成した伝記同士でも、年代などの記述が異なるケースがある。すなわち、ツァンパギャレーの死の直後に、すでに異なる伝承が存在していたことになる。直弟子とはいえ、ツァンパギャレーに付きっきりではなかったであろうから、直弟子同士が異なる情報を提示することは起こりえないことではない。

今後、さらにツァンパギャレー研究が進展し、詳細が解明されることが望まれる。

## 参考文献

### <一次文献>

*'Gro ba'i mgon po gtsang pa rgya ras pa'i rnam par thar pa ngo mtshar dad pa'i rlabs phreng* by Padma dkar po Nga dbang nor bu (1527-1592).

(Darjeeling edition) *'Gro ba'i mgon po gtsang pa rgya ras pa'i rnam par thar pa ngo mtshar dad pa'i rlabs, phreng*. Darjeeling: Kargyud Sungrab Nyamso Khang, 1973-1974. (TBRC's work number: W10736, vol. 3)

(Kathmandu edition) *'Gro ba'i mgon po gtsang pa rgya ras pa'i rnam par thar pa ngo mtshar dad pa'i rlabs phreng*. Kathmandu: Gam po pa library, 2007/2013. (TBRC's work number: W1KG15852)

*Chos rje 'gro ba'i mgon po gtsang pa rgya ras kyi rnam par thar ba* by rGyal thang pa bDe chen rdo rje (birth: 13th cen.).

(Anonymous edition) *Chos rje 'gro ba'i mgon po gtsang pa rgya ras kyi rnam par thar ba* (TBRC's Work Number: W1KG2849)

(Palampur edition) *Chos rje rin po che gtsang pa ye shes rdo rje'i rnam par thar pa. In Dkar brgyud gser 'phreng: A Thirteenth Century Collection of Verse Hagiographies of the Succession of Eminent Masters of the 'Brug-pa Dkar-brgyud-pa Tradition*. Palampur: Sungrab Nyamso Gyunphel Parkhang, 1973, pp. 485-525. (TBRC's Work Number: 23436)

*Chos rje 'gro ba'i mgon po gtsang pa rgyal sras kyi rnam par thar ba* by Mar ston (birth 12<sup>th</sup> cen.)

(Dehradun edition) *Chos rje 'gro ba'i mgon po gtsang pa rgyal sras kyi rnam par*

- thar ba*. In *Bka' brgyud gser 'phreng chen mo: Biographies of Eminent Gurus in the Transmission Lineage of Teachings of the 'Ba'-ra dKar-brgyud-pa Sect*. Dehradun (Published by Ngawang gyaltsen and Ngawang lungtok), 1970, Vol. 1 (Ka), pp. 412–451. (TBRC's Work Number: W19231)
- Chos rje gtsang pa rgya ras kyi rnam thar* by Sangs rgyas 'bum 'Bras mo jo btsun (birth: 12<sup>th</sup> cen.)
- (Palampur edition) *gTsang pa rgya ras kyi rnam thar*. In *Rwa lung dkar brgyud gser 'phreng: Brief Lives of the Successive Masters in the Transmission Lineage of the Bar 'Brug-pa Dkar-brgyud-pa of Rwa-lun* (4 volumes). Palampur: Sungrab Nyamso Gyunphel Parkhang, 1975–1978, vol. 1, pp. 397–452. (Reproduced from a set of prints from the 1771–1772 Spuns-than xylographic blocks.) (TBRC's Work Number: 19222)
- (Thimphu edition) *Chos rje gtsang pa rgya ras kyi rnam thar*. In *Dkar brgyud gser gyi 'phreng ba: A Collection of Biographical Materials on the Lives of the Masters of the Rwa-lun Tradition of the 'Brug-pa dKar-brgyud-pa Tradition in Tibet and Bhutan* (3 volumes), Thimphu: Tango Monastic Community, 1982, vol. 1, pp. 379–431. (\* TBRC's Work Number: 23861)
- Chos rje rin po che gtsang pa rgya ras pa'i rnam thar mgur 'bum dang bcas pa* in Lo ras pa dBang phyug brtson 'grus (1187–1250)
- (Leh edition) *Chos rje rin po che gtsang pa rgya ras pa'i rnam thar mgur 'bum dang bcas pa*. In *Dkar brgyud gser 'phreng: A Golden Rosary of Lives of Eminent Gurus*. Leh (Published by Sonam W. Tashigang), 1970, pp. 270–293. (TBRC's Work Number: 30123)
- Chos rje rin po che gtsang pa rgya ras pa'i rnam thar mgur 'bum dang bcas pa*. (Anonymous)
- (Bhutanese edition) *'Brug lugs gsung rab phyogs bsdebs las chos rje gtsang pa rgya ras kyi bka' 'bum glegs bam ka pa bzhugs so* and *'Brug lugs gsung rab phyogs bsdebs las chos rje gtsang pa rgya ras kyi bka' 'bum glegs bam kha pa bzhugs so* (Thimphu: The Bhutanese Monastic Body, 2011), vol. 1 (Ka), Ka, pp. 1.1–53.6.
- (Ladakhi edition) *The Collected Works (Gsun-Bum) of Gtsan-pa Rgya-ras Ye-sés-rdo-rje: Reproduced from Rare Manuscripts and Blockprints Belonging to Various Lamas and Notables of Ladakh* (Darjeeling: Kargyud Sungrab Nyamso

- Khang, 1972), pp. 243–293. (TBRC’s work number: 26076)
- rJe gtsang pa rgya ras kyi rnam thar* in Ra’i bande Mangala Bhadra (\* Ra bKra shis bzang po, after/during the 13th cen. or 15th cen.)
- (Bhutanese edition) *’Brug lugs gsung rab phyogs bsdebs las chos rje gtsang pa rgya ras kyi bka’ ’bum glegs bam ka pa bzhugs so* and *’Brug lugs gsung rab phyogs bsdebs las chos rje gtsang pa rgya ras kyi bka’ ’bum glegs bam kha pa bzhugs so* (Thimphu: The Bhutanese Monastic Body, 2011), vol. 2 (Kha), pp. 1.1–244.6.
- (Ladakhi edition) *The Collected Works (Gsun-Bum) of Gtsaṅ-pa Rgya-ras Ye-śes-rdo-rje: Reproduced from Rare Manuscripts and Blockprints Belonging to Various Lamas and Notables of Ladakh* (Darjeeling: Kargyud Sungrab Nyamso Khang, 1972), pp. 1–242. (TBRC’s work number: 26076)
- Thu’u bkwan grub mtha’ (Grub mtha’ thams cad kyi khungs dang ’dod tshul ston pa legs bshad shel gyi me long)*. Compiled by Thu’u bkwan Blo bzang chos kyi nyi ma (1737–1802) in 1802. Gansu: Kun su’i mi rigs dpe krun khang, 1984.
- Deb ther sngon po (Bod kyi yul du chos dang chos smra ba ji ltar byung ba’i rim pa)*. Compiled by ’Gos lo twa wa gzhon nu dpal (1392–1481) between 1476–1478. Ed. Chandra (1974).
- lHo ’brug chos ’bhung (Lho phyogs nags mo’i ljongs kyi chos ’byung)*. Compiled by Dge ’dun Rin chen (1926–1997) in 1972. Thimphu: KMT Publisher, 2004.
- lHo rong chos ’byung (Dam pa’i chos kyi byung ba’i legs bshad lho rong chos ’byung)*. Compiled by rTa tshag Tshe dbang rgyal (birth 15<sup>th</sup> cen.) in 1446. Lhasa: Bod ljongs bod yig dpe rnying dpe skrun khang, 1994.
- lHo’i chos ’byung (Lho’i chos ’byung ’phro mthud ’jam mgon smon mtha’i ’phreng ba)*. Compiled by bsTan ’dzin chos rgyal (?–1761) in 1759. Thimphu: KMT Publisher, 2004.

<二次文献>

[日文]

今枝由郎 (2003). 『ブータン中世史』 東京：大東出版社。

中井英基 (1970). チベットにおける仏教々団主の相続形態—ドゥク派 (hBrug-pa) におけるク・オン (khu-dbon) 相続をめぐって—『一橋論叢』63-6 : 82-101頁。

[欧文]

Aris, Michael (1979). *Bhutan: the Early History of a Himalayan Kingdom*, Warminster: Aris & Phillips Ltd.

Ardussi, John (1977). *Bhutan Before the British - A Historical Study*. (Ph.D. dissertation submitted to The Australian National University in 1977.)

Baillie, Luiza Maria (1999). Father Estevao Cacella's Report on Bhutan in 1627. *Journal of Bhutan Studies*. 1-1: 1-35.

Chandra, Lokesh (1974). *The Blue Annals*. New Delhi: International Academy of Indian Culture.

Imaeda, Yoshiro (2011). *Histoire médiévale du Bhoutan*. Tokyo: Toyo Bunko.

Karma Phuntsho (2013). *History of Bhutan*. Noida/London: Random House India.

Kumagai, Seiji, Gawa Thupten and Akinori Yasuda (2012). Introduction to the Collected Works of the Founder of the *Drukpa Kagyu* ('Brug pa bKa' brgyud) School: Tsangpa Gyare (gTsang pa rgya ras, 1161-1211). *Buddhism Without Borders: Proceedings of the International Conference on Globalized Buddhism, Bumthang, Bhutan May 21-23, 2012*. Thimphu: Centre for Bhutan Studies, pp. 36-52.

——— (2014). History and Current Situation of the Sa skya pa school in Bhutan. *Bhutanese Buddhism and Its Culture*, Kathmandu: Vajra Publications, pp. 127-139.

Martin, Dan (1979). Gling-ras-pa and the Founding of the 'Brug-pa School. *The Tibet Society Bulletin*. 13: 56-69.

Miller, W. Blythe (2005). The Vagrant Poet and the Reluctant Scholar: A Study of the Balance of Iconoclasm and Civility in the Biographical Accounts of Two Founder of the 'Brug pa bka' brgyud Lineages. *The Journal of the International Association of Buddhist Studies*. 28-2: 369-410.

——— (2006). 'Brug pa'i lo rgyus zur tsam: An Analysis of a Thirteenth Century Tibetan Buddhist Lineage History. *Tibet Journal*. 31-3: 17-42.

Roerich, George (trans.) (1996). *The Blue Annals* [2nd ed.]. Delhi: Motilal Banarsidas.

- Smith, E. Gene (1968). Foveword. Lokesh Chandra (ed.) Tibetan Chronicle of Padma-dkor-po. New Delhi: International Academy of Indian Culture. pp.1-8.
- Snellgrove, David (1968). *A Cultural History of Tibet*. New York: F.A. Praeger.
- Sørensen, Per K & Haoran, Hou. (forthcoming) The Invention of the Reincarnation Lineage of rGyal dbang 'Brug chen. *Buddhism, Culture and Society in Bhutan*.

熊谷 誠慈（くまがい せいじ）

京都大学こころの未来研究センター上廣倫理財団寄付研究部門

---

岩尾一史・池田 巧（編）

『チベット・ヒマラヤ文明の歴史的展開』

京都大学人文科学研究所 2018年3月刊

---